

大学生の大人になることへの意識

—就学前の母子関係に着目して—

横浜国立大学大学院教育学研究科 齋藤 彩
横浜国立大学保健管理センター 杉山 明子
横浜国立大学教育学部 井上 果子

University student's consciousness of matureness

大学生の大人になることへの意識

—就学前の母子関係に着目して—

University student's consciousness of matureness

齋藤 彩*・杉山 明子**・井上 果子***

問題

1. 大学生における心理的課題

従来、大学生は青年期の中でも青年期後期に位置付けられてきた(西平, 1990)。青年期後期は青年期の終わりであり、成人期の直前にあたる。実際には、発達とは時期ごとに分断されたものではなく、漸進的に進んでいく。したがって、大学生は青年期と成人期という2つの発達段階にまたがる移行期の段階に存在しているといえる。西平(1990)は、大学生について、「統合機能が優勢になる発達段階」と記述している。ここでいう統合とは、全体的にバランスのとれた行動様式、生活態度のことである。つまり、大学生は日常と調和した方向に、社会人として期待されている行動の方向に変化していくことが求められる。また近年では、青年期から成人期への移行期について、大人でもなく子どもでもない、「成人生成期(Arnett, 2000)」という独立した発達段階が確立されている。依然として、大学生は、就職や結婚、出産など、青年期の中でもより一層自分のアイデンティティを選び取る機会が増える時期である。

下山(1992)は、青年期の具体的な課題として職業選択に着目している。一方、中島(2003)は、職業選択という具体的な決定の有無・意識ではなく、「大人になること」を青年期の課題として挙げている。また山田(1983)は、大人になるということ

は、対人関係が安定していることでもあると述べている。つまり、青年期にまみられる対人緊張や対人敏感を消化し、集団といつでもとけ合える技術の習得や、個人的親密さを要求することも青年期の課題なのである。

以上のように、職業などのアイデンティティの選択だけではなく、人間として包括的に成熟し、大人になることは、青年期から成人期への移行期にいる大学生にとって重要な課題である。

2. 大学生の大人になることへの意識

山田(1983)は、卒業・就職の時期に不安やパニックを起こす大学生の存在は、大人に成熟していくのを拒否していることが原因であると指摘している。さらに菊池(1989)は、「大人になりたくない」あるいは自分を「大人」とみなさない傾向は、青年期全般に渡るものであるとしている。しかし、必ずしも不適応状態に陥るわけではなく、着実に適応的な成熟を遂げていこうとする大学生も多く存在する。大学生にとって「大人になる」という発達的な課題の捉え方、すなわち大学生の大人になることへの意識には、適応的な意識と不適応的な意識といった傾向の異なるものがある可能性が考えられる。

杉山ら(2004/2006)は、大人になることへの意識を捉えるための尺度を作成している。杉山ら(2006)の「改訂版大人になることへの意識尺度」は「成熟嫌悪」「成熟欲求」「成熟不安」「成熟不可解」の4因子20項目から成る。山田(1983)が大人

*横浜国立大学大学院教育学研究科

**横浜国立大学保健管理センター

***横浜国立大学教育学部

になることの条件として対人関係について指摘していることから、対人関係に関する成熟についても項目として取り入れ、「大人になることへの意識」をより多面的に捉えることができるようにする必要があると考えられる。

3. 適応的な成熟

青年期には大きな可能性が存在するが、生き方を選ぶ自由があるということは、他のすべての可能性を断念することでもあり、選択に伴う不安や自己責任は大きい(鈴木ら, 2002)。Erikson(1950)がこのような意思決定を危機(crisis)と呼んだように、アイデンティティを選び取ることは、苦痛を伴うことが考えられる。

小塩ら(2002)は、心理社会的発達において大きな変化が生じる青年期では、多くの困難や障害を乗り越えて適応していくための精神的回復力が重要な意味を持つとしている。小塩ら(2002)は、困難で脅威的な状況にもかかわらず、うまく適応する過程・能力・結果をレジリエンスとして定義し、レジリエンスの状態にある者の心理的特性を反映する尺度として「精神的回復力尺度」を作成している。本研究で扱う「大人になること」という大学生の課題は、精神発達上の危機を経験するなかで取り組むものである。大学生が「大人になる」という課題に向き合い、適応的な形で成熟に向かうためには、一時的に不適応状態に陥ったとしても、苦痛を乗り越え、よく適応していくための心理的特性が備わっていることが課題解決にとって重要だと考えられる。

また、自己を全体として肯定的に評価する感情である自尊感情は、人間が心理的に十分に機能するための基盤を支えるものとして、これまで多くの関心を集めてきた(無藤ら, 2004)。自尊感情を有するということは、生きていく上での様々な葛藤を処理する際の選択において、自己信頼に基づ

き、あるいは他者への肯定感情を基礎にして建設的な問題解決の糸口を探っていくことを可能にするものである(谷口, 2009)。阿部・今野(2007)は、自尊感情のなかでも状態自尊感情に着目し、「状態自尊感情尺度」を作成している。状態自尊感情とは、現時点の自分に対して感じる全体的な評価である。対人関係をはじめとして、日々変動する環境のなかで、大学生が現時点での自分に向き合い、自分自身を肯定的に評価できることは、適応を目指すうえで健康的な姿であるといえよう。

しかし、大人になることへの意識と適応の指標との関連についての実証的な検討は未だされていない。

4. 幼少期の母子関係

幼少期に愛着対象である母親と築いた関係と青年期の心理との関連を指摘する研究は多い(数井・遠藤, 2005、井梅, 2011)。愛着関係を「安定」「不安定」といった観点で捉えると幼少期以降に生じる問題が見えてくる。以下、青年期後期に生じうる対人関係や自己への感情など様々な心理的問題との関連を述べる。

まず対人関係において、安定した愛着関係では、柔軟な対処、孤独感の少なさ、対人関係での不安や敵意の低さといった特徴がある(数井・遠藤, 2005)。一方で、不安定な愛着関係では、親との関係において少なからず困難を抱え続け、仲間や友人との間に自由に新しい関係を作ることが難しいといった特徴がある。

また、自己に対する感情として、安定した愛着関係では自尊感情が高いといった特徴がある一方、不安定な愛着関係では自らの否定的な感情を適切に制御、処理する方法を学習してきていないために、相対的に多くの不適切な行動パターンを示すという可能性が指摘されている(数井・遠藤, 2005)。

困難時の援助希求性に関しては、安定型の愛着は、苦痛を認めて積極的にサポートを求め、回避型の愛着は、苦痛の表明やサポートを抑制し、アンビバレント型の愛着は、苦痛に対する感覚の高まりや苦痛の表明を促進するといった愛着スタイルによる特徴の違いが見られる(遠藤ら, 2008)。

さらに、病理との関連として、数井・遠藤(2005)は、安定した愛着関係がストレス状況下で病理を低める保護要因になる可能性を挙げている。一方、不安定な愛着関係では、ストレスが高い状況下においても、不安や苦痛を緩和するために他者との関係性や環境を有効に利用することが出来ず、悪循環に陥る可能性があり、こうした心的弾性のなさが精神病理のリスクを高めると述べている。

幼少期の母子関係について、酒井(2001)は「就学前の母子関係に関する尺度」を作成し、幼少期の愛着パターンが及ぼす青年期の対人関係への影響を強調している。

以上のように、幼少期の母子関係の在り方が、その後の多くの状況でも同様に作用し続け、対人関係上の問題や精神疾患の罹患リスクに影響が及ぶ可能性がある。特に大学生がおかれる発達段階では、「大人になる」という大きな課題に挑戦しなければならず、多くの不全感や困難感を味わう機会が増える。そのため、大人になることへの意識について、幼少期(就学前)の母子関係に着目して検討することは、精神的未熟さが生じさせ得る不適応状態への発達の理解に繋がると考えられる。

5. 男女差

小野寺(1993)は、日米青年の親子関係に関する比較研究において、日本では母親との情緒的結合や愛着に関して、女性では将来への不安との負の相関関係が示されるものの、男性では独立意識や将来への不安との関連は見られないといったように、顕著な性差があることを示している。水本・

山根(2010)も、母親との距離を近いと感じて信頼関係を築くことは、母親との間に安定した愛着を築いていることと関連し、母親と安定した愛着を築いている女性の精神的適応は高いと考えることができるとしている。

このように、親子関係、特に母子関係の在り方と自分の将来に対する意識や精神的適応には関連があり、性差もみられている。しかし、愛着関係の基礎が築かれるはずの幼少期における母子関係の在り方について想起し「大人になることへの意識」といった具体的な自立および成熟への意識や、「精神的回復力」「状態自尊感情」といった精神的適応との関連の性差を検討した研究は見られない。

そこで、本研究では母子関係を就学前に限定したうえで、当時の母子関係の在り方の認識が、大学生の精神的適応や大人になることへの意識へ及ぼす影響、及び性差を検討していく。

目的

大人になるためには、社会的に成人となることや、姿形が成長した状態であることのみでなく、精神的成熟が必要となる。精神的に成熟していくことには、自らの成熟に対する意識の捉え方が関連している(山田, 1983)。

そこで、本研究では、大学生の精神的成熟に焦点をあて、第1研究で大人になることへの意識を測定する尺度を作成する。さらに、第2研究では大人になることへの意識を規定する諸要因について、就学前の母子関係を中心として明らかにすることを目的とする。

第1研究

I. 目的

大学生を対象に、大人になることへの意識を明らかにする尺度を作成する。

II. 方法

1. 調査対象者および調査時期：

首都圏国立大学の学生 119 名を対象に、2017 年 7 月に行った。無回答など回答に不備のあった回答者を除き、有効回答者は 118 名(うち男性 73 名、女性 45 名)となった。平均年齢は 19.23 歳 ($SD=1.22$) であった。

2. 調査方法：

個別自記入式の質問紙調査を集合調査形式で実施した。調査開始時には文書と口頭説明により、回答の合意を得た。実施時間は約 15 分であった。

3. 質問紙の構成：

表 1 追加項目

12	大人になり切れない感じがする
13	大人として自立できるか不安だ
14	理想とする大人になれるか不安だ
15	大人としての自覚が足りないと思う
16	大人になることを考えると焦りを感じる
17	悪い大人にならないか不安に思う
27	大人になるイメージが湧かない
28	子どもと大人の境界線が分からない
29	そのうち大人になれるだろう
30	大人になることについてあまり深く考えない
31	大人になることは自分にとってあまり重要なことではないと思う
32	大人になると、人に気を遣うことに疲れそうだ
33	大人としての人との付き合い方が分からない
34	大人になると、誰にも頼ってはいけない感じがする
35	大人になると、人に合わせなければいけない気がする
36	大人として個人的な深い付き合いができるか不安だ

①新・大人になることへの意識予備尺度：杉山ら(2006)の「改訂版大人になることへの意識尺度」に、小此木(1978)や山田(1983)、下山(1992)のモラトリアム心理や成熟に関する理論を参考にして新たに 16 項目を追加した。計 36 項目について、4 件法で回答を求めた。

②属性記入欄：調査対象者の学部、学年、年齢、性別の記入を求めた。

III. 結果

1. 尺度の得点化

新・大人になることへの意識予備尺度について、「全くあてはまらない」を 1 点、「あまりあてはまらない」を 2 点、「少しあてはまる」を 3 点、「非常にあてはまる」を 4 点として得点化を行った。

2. 新・大人になることへの意識予備尺度の因子分析

予備尺度項目 36 項目に対して、主因子法プロマックス回転による探索的因子分析を行った。固有値 1.0 以上の因子数と因子解釈可能性から、5 因子構造が妥当であると判断し、繰り返し因子分析を行った。最終的に、5 因子 28 項目が採用された。5 因子の累積寄与率は 50.80% であった。

第 1 因子は、「大人になれないのでは、と思うと不安だ」「大人になれないのでは、と思うと怖い」「大人にならなければ、というプレッシャーがある」など、大人になれないことへの不安と自信の無さを示す内容であったため、「成熟不安」因子と命名した。第 2 因子は、「責任ある立場や仕事に就きたい」「社会の中で自立した存在として認められたい」「大人になるのが楽しみだ」など、大人になることへの肯定的イメージや積極性、大人になることへの前向きな姿勢や期待を示す内容であったため、「成熟への肯定」因子と命名した。第 3 因子は、「大人になるというのがどういうことなのかよく分からない」「子どもと大人の境界線が分からない」「大人になるイメージが湧かない」など、大人になるイメージの不明確さや、大人になることへの無意欲さ、しらくとといった態度を示す内容であったため、「成熟不可解」因子と命名した。第 4 因子は、「大人になると、人に合わせなければい

表2 新・大人になることへの意識尺度の因子分析結果

	I	II	III	IV	V
成熟不安($\alpha=.91$)					
大人になれないのではと思うと不安だ	1.12		-0.17	-0.23	
大人になれないのでは、と思うと怖い	1.15		-0.14	-0.28	
大人にならなければ、というプレッシャーがある	0.73	0.12		0.16	
大人として自立できるか不安だ	0.60				
大人になり切れない感じがする	0.59	-0.22	0.13	0.19	
何となく、大人になれない気がする	0.54	-0.26	0.16	0.17	
大人になることを考えると焦りを感じる	0.48	0.20	0.19	0.28	
悪い大人にならないか不安に思う	0.48	0.13	0.12	-0.14	0.16
理想とする大人になれるか不安だ	0.41	0.30		0.21	
成熟への肯定($\alpha=.82$)					
責任ある立場や仕事に就きたい		0.87	0.16		
社会人として認められる仕事をしたい	-0.11	0.75		0.17	
社会の中で自立した存在として認められたい		0.75			
早く一人前になりたい	0.25	0.62	0.11	-0.15	-0.10
大人になるのが楽しみだ		0.54		-0.32	-0.21
成熟不可解($\alpha=.74$)					
大人になるというのが、どういうことなのかよく分からない			0.85		
子どもと大人の境界線が分からない			0.70	0.13	
大人になるイメージが湧かない			0.65		
就職しても、大人ではない気がする			0.55		-0.34
大人になることは自分にとってあまり重要なことではないと思う			0.50	-0.34	-0.13
成熟した対人関係への不安($\alpha=.76$)					
大人になると、人に合わせなければいけない気がする	-0.25		-0.18		0.11
大人になると、人に気を遣うことに疲れそうだ	-0.25	0.16	0.20	0.85	0.24
大人としての人との付き合い方が分からない	-0.11		0.18	0.65	0.14
大人になると、誰にも頼ってはいけない感じがする				0.61	
成熟嫌悪($\alpha=.84$)					
大人になると、思い通りにできないことが増えて嫌だ					0.78
大人の世界には担わなければならない役割が多くて嫌だ	0.10				0.71
大人は時間的な縛りが多くて大変だ					0.68
大人になると、自分のやりたくないことをやらされる				0.14	0.68
大人になるのはめんどくさい		-0.33	0.22	0.38	0.51
【固有値】	9.22	5.23	2.52	2.00	1.68
【因子寄与率(%)】	15.2	9.8	9.4	8.8	7.6
【因子間相関】	I	II	III	IV	V
I		0.08	0.34	-0.34	-0.70
II			-0.15	0.43	-0.08
III				-0.43	-0.44
IV					0.37
V					

けない気がする」「大人になると、人に気を遣うことに疲れそうだ」「大人としての人との付き合い方が分からない」など対人関係場面での大人になり切れないさといった態度を示す内容であったため、「成熟した対人関係への不安」因子と命名した。

第5因子は、「大人になると、思い通りにできないことが増えて嫌だ」「大人の世界には担わなければならない役割が多くて嫌だ」「大人は時間的な縛りが多くて大変だ」など、大人になることへの否定的なイメージを示す内容であったため、「成

熟嫌悪」因子と命名した。以下の下位尺度から構成する全28項目を「新・大人になることへの意識尺度」と命名し、以降の分析に使用した。各因子の信頼性係数は、「成熟不安」で.91、「成熟への肯定」で.82、「成熟不可解」で.74、「成熟した対人関係への不安」で.76、「成熟嫌悪」で.84であり、尺度としての使用に耐え得る内的一貫性があると判断した。

IV. 考察

1. 新・大人になることへの意識尺度の構造

本研究で作成した新・大人になることへの意識尺度では、「成熟不安」「成熟への肯定」「成熟不可解」「成熟した対人関係への不安」「成熟嫌悪」の5因子が抽出された。杉山ら(2006)が作成した従来の大人になることへの意識尺度に、山田(1983)が大人になること条件として挙げた対人関係の安定性についての項目を含む因子の「成熟した対人関係への不安」が加えられた。また「成熟への肯定」は杉山ら(2006)の「成熟欲求」に含まれる項目と同様の項目で構成されたが、本研究では大人になることに対する欲求だけでなく、大人になることへの肯定感や期待といった意味合いも含まれていると考え、因子名の改名を行った。現代大学生の成熟に対する意識をより詳細に捉えることができる尺度が得られたと言える。

第2研究

I. 目的

大人になることへの意識に、就学前の母子関係や精神的回復力及び状態自尊感情が与える影響について検討する。

II. 方法

1. 調査対象者及び調査時期：

調査は、首都圏国立大学の学生152名を対象に

して2017年11月に行った。無回答など回答に不備のあった回答者を除き、有効回答者は、136名(うち男性99名、女性37名)で、平均年齢は19.18歳($SD=1.02$)であった。

2. 調査方法：

個別自記入式の質問紙調査を、集合調査形式で実施した。調査開始時には文書と口頭で説明し、回答の合意を得た。実施時間は約15分であった。

3. 質問紙の構成：

- ①新・大人になることへの意識尺度：第1研究で作成した新・大人になることへの意識尺度を使用した。計28項目について、4件法で回答を求めた。
- ②就学前の母子関係に関する尺度(酒井, 2001)：就学前の良好な母子関係を反映した「就学前の安定的な母子関係」、母親の関心の無さや拒否を反映した「就学前の拒否的な母子関係」、母親への依存的傾向を反映した「就学前のアンビバレントな母子関係」の3つの下位因子から構成される計16項目について、6件法で回答を求めた(表3)。
- ③状態自尊感情尺度(阿部ら, 2007)：現時点の自分に対して感じる全体的な評価に関する内容である「状態自尊感情」の1因子構造で、9項目から成る(表4)。5件法で回答を求めた。
- ④精神的回復力尺度(小塩ら, 2002)：'新たな出来事に興味や関心をもち、さまざまなことにチャレンジしていこうとする心理的特性'である「新奇性追求」、'自分の感情をうまく制御することができる心理的特性'である「感情調整」、'明るくポジティブな未来を予想し、その将来に向けて努力しようとする心理的特性'である「肯定的未来志向」の3つの下位因子から構成される計21項目から成る(表5)。5件法で回答を求めた。

表3 就学前の母子関係尺度項目(酒井, 2001)

就学前の安定的な母子関係	
1	私は母親のそばでは安心感があった
2	母親と遊ぶのが楽しかった
3	母親と出かけるのがうれしかった
4	私は母親を好きだった
5	私はよく母親に、ほめられた
6	私は母親が何をしていても、それに関心がなかった*
就学前の拒否的な母子関係	
7	私は母親の愛情がうすいと思ったことがあった
8	いつか見捨てられるのではないかと思った
9	助けて欲しいときに、母親は助けてくれないことがあった
10	私が泣いていても、母親は関心がなかった
11	私は同じことをしても怒られたり、怒られなかったりした
就学前のアンビバレントな母子関係	
12	母親が出かける時には、むりやりついて行こうとした
13	幼稚園(保育園)に行っても、母親を思い出してずっと泣いていたことがあった
14	親戚の家に遊びに行っても、親がいないとこわかった
15	母親がそばにいないと、夜眠れなかった
16	何かあれば、母親はすぐに来てくれると思っていた

*: 逆転項目

表4 状態自尊感情尺度項目(阿部・今野, 2007)

1	いま、自分は人並みに価値のある人間であると感じる
2	いま、自分には色々な良い素質があると感じる
3	いま、自分は敗北者だと感じる*
4	いま、自分は物事を人並みにうまくやれていると感じる
5	いま、自分には自慢できるところがないと感じる*
6	いま、自分に対して肯定的であると感じる
7	いま、自分にほぼ満足を感じる
8	いま、自分はだめな人間であると感じる*
9	いま、自分は役に立たない人間であると感じる*

*: 逆転項目

表5 精神的回復力尺度項目(小塩ら, 2002)

新奇性追求	
1	色々なことにチャレンジするのが好きだ
2	新しいことや珍しいことが好きだ
3	ものごとに対する興味や関心が強いほうだ
4	私は色々なことを知りたいと思う
5	困難があっても、それは人生にとって価値のあるものだと思う
6	慣れないことをするのは好きではない*
7	新しいことを始めるのはめんどろうだ*
感情調整	
8	自分の感情をコントロールできるほうだ
9	動揺しても、自分を落ち着かせることができる
10	いつも冷静でいられるようところがけている
11	ねばり強い人間だと思う
12	気分転換がうまくできないほうだ*
13	つらい出来事があると耐えられない*
14	その日の気分によって行動が左右されやすい*
15	あきっぱいほうだと思う*
16	怒りを感じるとおさえられなくなる*
肯定的な未来志向	
17	自分の将来にはきっといいことがあると思う
18	将来の見通しは明るいと思う
19	自分の将来に希望をもっている
20	自分には目標がある
21	自分の目標のために努力している

*: 逆転項目

⑤属性記入欄：調査対象者の学部、学年、年齢、性別の記入を求めた。

Ⅲ. 結果

1. 尺度の得点化

新・大人になることへの意識尺度について、「全くあてはまらない」を1点、「あまりあてはまらない」を2点、「少しあてはまる」を3点、「非常にあてはまる」を4点として得点化を行った。就学前の母子関係に関する尺度は「全くあてはまらない」を1点、「あてはまらない」を2点、「あまりあてはまらない」を3点、「少しあてはまる」を4点、「あてはまる」を5点、「非常によくあてはまる」を6点として得点化を行った。状態自尊感情尺度については、「あてはまらない」を1点、「どちらかとい

うとあてはまらない」を2点、「どちらともいえない」を3点、「どちらかというとあてはまる」を4点、「あてはまる」を5点として得点化を行った。精神的回復力尺度については、「いいえ」を1点、「どちらかというといいえ」を2点、「どちらでもない」を3点、「どちらかというとはい」を4点、「はい」を5点として得点化を行った。

2. 性別における大人になることへの意識と諸要因との相関分析

就学前の母子関係に関する尺度、状態自尊感情及び精神的回復力尺度と新・大人になることへの意識尺度との相関係数について、ピアソンの相関分析を用い、男性と女性の結果をそれぞれ算出した。男性の結果を表6、女性の結果を表7に示す。

2-1. 男性における新・大人になることへの意識尺度と諸要因との相関分析

男性において、新・大人になることへの意識尺度と就学前の母子関係に関する尺度との相関係数を算出した結果、「成熟不安」「成熟した対人関係への不安」と「就学前の拒否的な母子関係」の間、「成熟した対人関係への不安」と「就学前の拒否的な母子関係」「就学前のアンビバレントな母子関係」の間、「成熟への肯定」と「就学前の安定的な母子関係」との間に弱い正の相関が見られた。

また、新・大人になることへの意識尺度と状態

自尊感情尺度との相関係数を算出した結果、「成熟不安」「対人関係における精神的未熟さ」と「状態自尊感情」の間に中程度の負の相関、「成熟への肯定」「成熟嫌悪」と「状態自尊感情」の間に弱い負の相関が見られた。

さらに、新・大人になることへの意識尺度と精神的回復力尺度の相関係数を算出した結果、「成熟への肯定」と「新奇性追求」「肯定的な未来志向」の間に弱い正の相関、「成熟不安」と「感情調整」「肯定的な未来志向」の間、「成熟不可解」と「肯定的な未来志向」の間、「成熟した対人関係への不安」と「感情調整」「肯定的な未来志向」の間、「成熟嫌悪」と「感情調整」「肯定的な未来志向」の間に弱い負の相関が見られた。

2-2. 女性における新・大人になることへの意識尺度と諸要因との相関分析

女性において、新・大人になることへの意識尺度と就学前の母子関係に関する尺度との相関係数を算出した結果、「成熟不安」「成熟嫌悪」と「就学前のアンビバレントな母子関係」との間に中程度の正の相関が見られた。

また、新・大人になることへの意識尺度と状態自尊感情尺度との相関係数を算出した結果、「対人関係における精神的未熟さ」「成熟嫌悪」と「状態自尊感情」との間に中程度の負の相関が見られた。

表6 男性の相関分析結果

		就学前の母子関係			状態自尊感情	精神的回復力		
		安定的	拒否的	アンビバレント	状態自尊感情	新奇性追求	感情調整	肯定的な未来志向
大人になることへの意識	成熟への肯定	.35*	-.05	.15	.24*	.21*	.00	.33**
	成熟不安	-.04	.25*	.14	-.49**	-.17	-.34**	-.38**
	成熟不可解	.01	.13	.02	-.19	.03	-.04	-.31**
	成熟した対人関係への不安	-.06	.26*	.21*	-.48**	-.20	-.34**	-.32**
	成熟嫌悪	.00	.07	-.05	-.34**	-.16	-.31**	-.27**

* $p < .05$, ** $p < .01$

表7 女性の相関分析結果

		就学前の母子関係			状態自尊感情	精神的回復力		
		安定的	拒否的	アンビバレント	状態自尊感情	新奇性追求	感情調整	肯定的な未来志向
大人になることへの意識	成熟への肯定	.11	.10	.04	-.06	.34*	-.04	.22
	成熟不安	.18	.08	.58**	-.18	-.17	-.30	.04
	成熟不可解	.01	-.05	.19	-.06	-.32	-.30	-.26
	成熟した対人関係への不安	-.16	.20	.21	-.54**	-.34*	-.55**	-.34*
	成熟嫌悪	-.23	.17	.42**	-.52**	-.37*	-.54**	-.47**

* $p < .05$, ** $p < .01$

さらに、新・大人になることへの意識尺度と精神的回復力尺度との相関係数を算出した結果、「成熟への肯定」と「新奇性追求」の間に弱い正の相関、「成熟した対人関係への不安」「成熟嫌悪」と「新奇性追求」の間に弱い負の相関、「成熟した対人関係への不安」「成熟嫌悪」と「感情調整」の間に中程度の負の相関、「成熟した対人関係への不安」と「肯定的な未来志向」の間に弱い負の相関、「成熟嫌悪」と「肯定的な未来志向」の間に中程度の負の相関が見られた。

3. 大人になることへの意識に関連する諸要因の因果関係

大人になることへの意識と就学前の母子関係、状態自尊感情及び精神的回復力の因果関係を明らかにするために、パス解析を行った。解析に用いた変数は3水準に整理された。第1水準は就学前の母子関係に関する尺度の3変数、第2水準は精神的回復力尺度の3変数と状態自尊感情の1変数、第3水準は新・大人になることへの意識尺度の5変数であった。解析は、ステップワイズ法による重回帰分析を行った。男性についての結果を図1、女性を図2に示す。なお、矢印は実線が有意な正のパスを示し、破線が有意な負のパスを示す。数値は標準偏回帰係数を示す。

3-1. 男性における因果関係

男性においては、「成熟への肯定」に対して「就学前の安定的な母子関係」から有意な正のパスが示され、「感情調整」から有意な負のパスが示された。「成熟不安」に対しては、「状態自尊感情」から有意な負のパスが示された。「成熟した対人関係への不安」に対しては「就学前のアンビバレントな母子関係」から有意な正のパス、「状態自尊感情」から有意な負のパスが示された。「成熟不可解」に対しては、「状態自尊感情」から有意な負のパスが示された。「成熟嫌悪」に対してはいずれの変数からも有意なパスは示されなかった。

「新奇性追求」に対してはいずれの変数からもパスは示されなかった。「感情調整」に対しては「就学前の拒否的な母子関係」から有意な負のパスが示された。「肯定的な未来志向」に対してはいずれの変数からも有意なパスは示されなかった。

「状態自尊感情」に対してはいずれの変数からも有意なパスは示されなかった。

3-2. 女性における因果関係

女性については、「成熟への肯定」に対してはいずれの変数からも有意なパスは示されなかった。「成熟不安」に対しては「感情調整」から有意な負のパス、「肯定的な未来志向」「就学前のアンビバレントな母子関係」から有意な正のパスが示された。「成熟した対人関係への不安」に対しては「感

情調整」から有意な負のパスが示された。「成熟不可解」に対してはいずれの変数からも有意なパスは示されなかった。「成熟嫌悪」に対しては「就学前のアンビバレントな母子関係」から有意な正のパスが示された。

「新奇性追求」「感情調整」に対しては「就学前の安定的な母子関係」から有意な正のパスが示された。「肯定的な未来志向」に対しては「就学前の安定的な母子関係」から有意な正のパス、「就学前のアンビバレントな母子関係」から有意な負のパスが示された。

「状態自尊感情」に対しては、「就学前の安定的な母子関係」から有意な正のパス、「就学前のアンビバレントな母子関係」から有意な負のパスが示された。

IV. 考察

1. 性別における大人になることへの意識と状態自尊感情及び精神的回復力との関連

1-1. 男性における新・大人になることへの意識尺度と諸要因との関連

男性では、「就学前の安定的な母子関係」の高さと「成熟への肯定」の高さに関連が見られた。このことから、幼少期の安定した母子関係が、「大人になること」という葛藤を伴う課題に対しても病理に陥らず前向きに取り組む適応的な意識と関連があることが示唆された。この結果は、数井・遠藤(2005)の、安定した愛着関係がストレス状況下で病理を低める保護要因になる可能性があるという主張を支持するものといえよう。また、「就学前の拒否的な母子関係」「就学前のアンビバレントな母子関係」といった幼少期の不安定な母子関係と「成熟した対人関係への不安」の高さに関連が見られた。この結果から、不安定な母子関係の中で愛着関係の基礎を欠くことは、大学生という発達段階においても大学生以前の対人関係とはさら

に質が異なる「大人」としての人付き合いに対する不安感と関連があることが示唆される。

また、「状態自尊感情」の低さと「成熟不安」の高さに関連が見られた。崔・新井(1998)や小塩ら(2002)をはじめとして、自尊感情の高さは精神的健康の高さを示すとしている。つまり、自己を肯定的に評価できず、自己信頼感に乏しいような精神的に不健康な傾向と、「大人になる」という課題に対して、自分を信じて生き方を選択することへのためらいや戸惑いから生じる不安の高まりには関連があると考えられる。

さらに、男性では、精神的回復力と大人になることへの意識について、「肯定的な未来志向」の高さと「成熟への肯定」の高さに関連が見られた。このことから、男性においては、肯定的な将来への努力をする能力の高さは、自らの成熟という課題に対する取り組みの前向きさと関連があることが示唆される。一方で、「肯定的な未来志向」の低さと「成熟不安」「成熟不可解」の高さに関連が見られた。このことから、男性においては、自らの将来に前向きに努力する能力の低さが、「大人になる」という課題に直面している実感はあるが上手く適応していけるか分からないといった不安感の高さや、大人になることは“不可解”であり自分にとって“重要なことではない”と課題との距離をとる傾向と関連すると考えられる。さらに「感情調整」の低さと「成熟不安」の高さに関連が見られたことから、自分の感情を上手く制御できる能力の低さは、自らの成熟に対する不安感の高さと関連があることが示唆された。小塩ら(2002)は、心理社会的発達において大きな変化が生じる青年期では、多くの困難や障害を乗り越えて適応していくために精神的回復力が重要な意味を持つとしている。特に男性では自分の将来を肯定的に捉え、自分の感情を上手く制御する能力のあり方が、自らの成熟を肯定的に捉え、大人になることに対

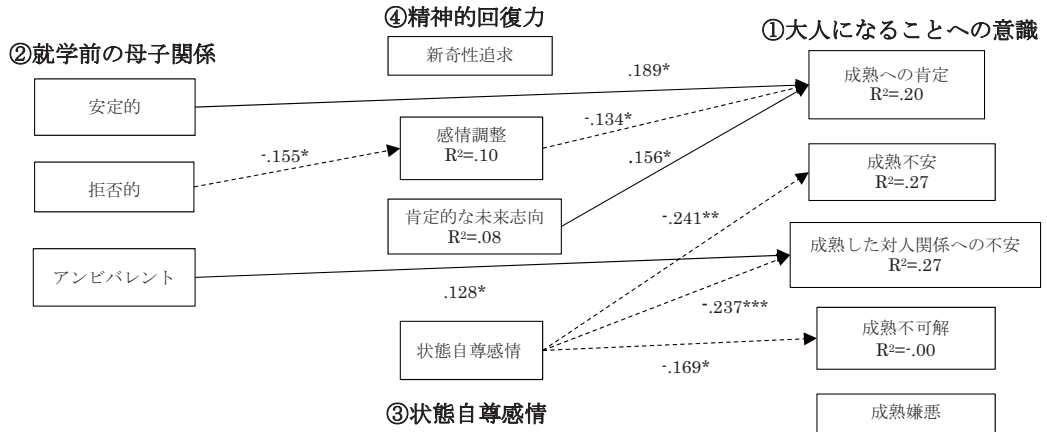


図1 男性のパス・ダイアグラム

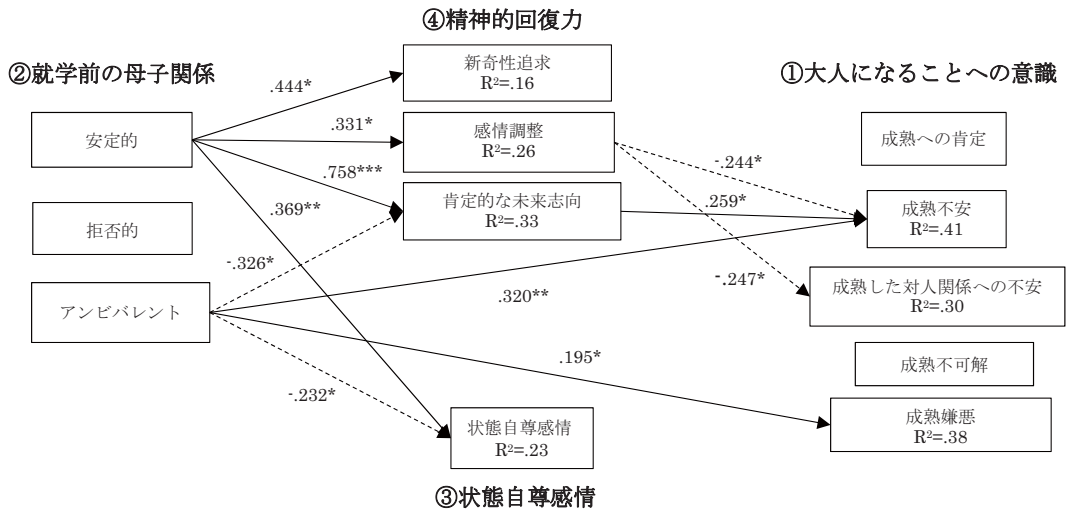


図2 女性のパス・ダイアグラム

する不安感と上手く付き合いながら適応的に成熟していく意識に関連することが推察される。

1-2. 女性における新・大人になることへの意識と諸要因の関連

女性では、不安定な母子関係のなかでも特に「就学前のアンビバレントな母子関係」と「成熟不安」「成熟嫌悪」の高さに関連が見られた。幼少期のアンビバレントな母子関係と「大人になること」という課題に対して不安や嫌悪といった陰性感情が強く意識されることに関連が見られたことから

は、数井・遠藤(2005)がアンビバレント型の愛着は苦痛に対する感覚の高まりや苦痛の表明を促進するとしていう主張を支持する結果であるといえる。

また、「状態自尊感情」の低さと「成熟した対人関係における未熟さ」「成熟嫌悪」の高さとの関連が見られた。女性において、現在の自己を肯定的に評価できない精神的に不健康な傾向と、成熟した対人関係を築くことへの不安や成熟することに対する嫌悪感には関連があることが示唆された。

さらに、「感情調整」の能力の低さと「成熟した対人関係への不安」「成熟不安」の高さに関連が見

られた。女性では、感情を上手く制御する能力の低さが、「大人になる」という今までに経験した事のない新しい課題に直面した際の不安感の高まりや、対人関係の問題のなか生じる自らの未熟さへの不安といった意識と関連することが示唆された。

2. 幼少期の母子関係、状態自尊感情及び精神的回復力が大人になることへの意識に及ぼす影響

本研究では、大人になることへの意識に関連する諸要因の因果関係について、男女の結果にいくつか差が見られた。

2-1. 男性における因果関係

男性の場合は、不安定な愛着関係のなかでも「就学前の拒否的な母子関係」が「感情調整」ないし「成熟への肯定」に影響し、かつ「就学前のアンビバレントな母子関係」が「対人関係における精神的未熟さ」に直接的に影響しているのが特徴的である。

また、「状態自尊感情」から「成熟不安」「成熟した対人関係への不安」「成熟不可解」への影響が見られたが、「状態自尊感情」には幼少期の母子関係からの影響が見られなかった。本研究において、男性の場合、現時点での自分を肯定的に評価できるかどうかが大になることへの意識の在り方に大きく影響することは明らかになったが、今回の結果からは、状態自尊感情に影響を与える要因が見られなかった。今後は、幼少期の母子関係とは別の要因を加えて検討すべきであるといえる。

2-2. 女性における因果関係

女性の場合は就学前の母子関係が拒否的であったかはあまり重要ではなく、「就学前のアンビバレントな母子関係」の影響が大きいことが示され

た。特に女性が就学前にアンビバレントな母子関係が「成熟不安」や「成熟嫌悪」へ直接的に影響していることから、「大人になる」という課題に対して不安や嫌悪といった陰性感情が強く意識される傾向にあることが示唆される。アンビバレントな関わり方をする親は、再接近期の子どものアンビバレントを扱い切れなかったため、子どもは安心して母子分離を果たすことができないまま大学生となり、自立できない不安感や嫌悪感を抱くことになっていると考えられる。

女性において、「就学前に安定的な母子関係」を経験し「肯定的な未来志向」が高いにもかかわらず「成熟不安」が高まるという結果が得られた。このことから、女性では、幼少期に安定した母子関係を築いたと感じている場合、基本的には将来に対して漠然とした希望を持って努力することができるが、「大人になる」という課題に直面化すると不安が強く意識される傾向にあるということが示唆される。しかし、この結果には多重共線性の問題が疑われる。今後は、より正確な考察を行うために更なる解析が必要と考えられる。

2-3. 男女における差

男女差を検討するために、t検定を行ったが明確な差が見られなかった。そのため、本研究では男女それぞれの重回帰分析の結果を比較して男女差について検討する。

数井・遠藤(2005)は、養育者からよい環境と暖かい愛情に満ちた働きかけを与えられた子どもは望ましい人格を築き上げ、その現れとして自尊感情が高くなると述べている。本研究における男性の結果として「就学前の安定的な母子関係」から「成熟への肯定」に直接的な影響が見られたことや、女性における結果として「就学前の安定的な母子関係」から精神的回復力の各因子や「状態自尊感情」に影響が見られたことは数井・遠藤(2005)

の主張を支持するものであるといえよう。

一方、男女の傾向の違いとして、男性では、就学前の母子関係が個人特性に及ぼす影響はあまり見られず、「就学前の安定的な母子関係」から「成熟への肯定」に、「就学前のアンビバレントな母子関係」から「成熟した対人関係への不安」に対して直接的に影響が及んでいた。小野寺(1993)では、日本人男性の場合、母子関係と将来への不安との間に関連がみられなかった。本研究では、将来という漠然としたものへの不安よりも、「対人関係」に焦点化された場合に、自身の不安定な母子関係の在り方が直接的に不安感に結びつくことを示唆する結果となったといえる。また女性は、就学前の母子関係が、精神的回復力や状態自尊感情といった個人特性に影響し、個人特性の在り方を介して大人になることへの意識に影響を及ぼすという、男性と比較するとやや複雑なプロセスが特徴的であることが示された。本研究では、母子関係を規定因として検討を行ったが、水本・山根(2010)が示すような母娘関係の心理的距離の近さや、女性にとって母親は同一化の対象であることを考えると、自らの個人特性の形成には母子関係の在り方による影響が男性に比べてより反映されやすいといえる。このことから、就学前の母子関係の在り方が基となって形成された個人特性を介する形で、大人になることへの意識に対する影響が見られたと推察される。

男性の同一化の対象が父親であることを考えると、「大人になる」ことにおいても、父親の影響を受けている可能性があるが、本研究で父親からの影響に言及するには限界がある。今後は、幼少期の母子関係だけではなく、父子関係にも焦点を当てて検討していくことが望まれる。

全体的考察

本研究では、現代の大学生の大人になることへ

の意識をより多面的に測定する「新・大人になることへの意識尺度」を作成した。従来の尺度に項目を追加したことで、大学生の大人になることへの意識について5側面に分けてより詳細に解釈することを可能にした。また、幼少期の母子関係に焦点を当て、現在の自分への肯定的な評価や、成熟を目指すうえで重要な心理的特性に影響し、自らが大人になることに対する意識の違いをもたらすことを実証的に検討した。以上より、本研究は現代の大学生の成熟について捉える上で一考察を示したといえる。

本研究の課題および今後の展望

本研究の課題として、次の3点が挙げられる。第1に、本研究で作成した「新・大人になることへの意識尺度」の妥当性についてである。今後は類似概念を測定する尺度との相関分析などを通して、基準関連妥当性を検討していくことが求められる。

第2に、サンプルサイズの問題である。本研究では、本調査の際に男性と女性に分けて解析を行っているが、有効回答者には性別間の人数にばらつきがある。本研究では、ある程度の男女の相違点を見ることが出来たが、少ないサンプルによる限定的な結果が得られたに過ぎない。今後はサンプル数を増やし、各性別の人数を均一にすることで、より正確で詳細な検討が可能になると考えられる。

第3に、幼少期の母子関係についての質問の際の回答者への配慮という点である。幼少期の記憶が曖昧なままの回答があった可能性への考慮や、母親と幼少期に別居していたなどの状況への配慮が必要だったと考えられる。

引用文献

阿部美帆・今野裕之(2007). 状態自尊感情尺度の

- 開発 パーソナリティ研究, 16, 36-46.
- 遠藤利彦・谷口・弘一・金政祐司・串崎真志(2008). 成人のアタッチメント—理論・研究・臨床—北大路書房
- Erikson, E. H. (1950). *Childhood and society*. Norton. 仁科弥生訳(1977). 幼児期と社会 みすず書房
- 井梅由美子(2011). 青年期女兒の母娘関係と対象関係 東京未来大学研究紀要, 4, 22-35.
- 数井みゆき・遠藤利彦(2005). アタッチメント—生涯にわたる絆—ミネルヴァ書房
- 菊池 則行(1989). 青年の自己形成要求に関する研究—大学生を対象として— 青年心理学研究, 3, 1-9.
- 崔 京姫・新井邦次郎(1998). ネガティブな感情表出の制御と友人関係の満足感および精神的健康との関係 日本教育心理学研究, 46, 432-441.
- 水本深喜・山根律子(2010). 青年期から成人期への移行期の女性における母親との距離の意味：精神的自立・精神的適応との関連性から 発達心理学研究, 21, 254-256.
- 無藤 隆・森 敏昭・遠藤由美・玉瀬耕治(2004). 心理学 有斐閣
- 中島香澄(2003). 現代学生にみられる強迫的心性と青年期発達課題(大人になること)への意識 ころの健康, 18, 60-68.
- 西平直喜(1990). 大人になるということ—成育史心理学から— 東京大学出版
- 小此木啓吾(1978). モラトリアム人間の時代 中央公論社
- 小野寺敦子(1993). 日米青年の親子関係と独立意識に関する比較研究 心理学研究, 64, 147-152.
- 小塩真司・中谷素之・金子一史・長峰伸治(2002). ネガティブな出来事からの立ち直りを導く心理的特性—精神的回復力尺度の作成— カウンセリング研究, 35, 57-65.
- 酒井 厚(2001). 青年期の愛着関係と就学前の母子関係—内的作業モデル尺度作成の試み— 性格心理学, 9, 59-70.
- 下山晴彦(1992). 大学生のモラトリアムの下位分類の研究—アイデンティティの発達との関連で— 日本教育心理学研究, 40, 121-129.
- 杉山明子・田村和子・井上果子(2004). 現代大学生の「大人になることへの意識」 日本教育心理学会第46回総会発表論文集, 614.
- 杉山明子・日下祐佳子・井上果子(2006). 大人になることへの意識と内省傾向の関連 日本心理学会第70回大会発表論文集, 152.
- 鈴木乙史・佐々木正宏・吉村順子(2002). 女子大生がカウンセリングを求めるとき—こころのキャンパスガイド— ミネルヴァ書房
- 谷口和美(2009). 子どもの心身発達に関する「甘え」の今日的意義—人的環境要因としての家族の係わりを考える— 心身健康科学, 5, 27-34.
- 山田和夫(1983). 成熟拒否—おとなになれない青年たち— 新曜社